〔易林本節用集不草木〕梠茎菜　蕗同

〔東雅十三穀蔬〕蕗フヽキ　倭名鈔に、崔禹錫食經に、蕗葉似葵而圓廣、其莖煮可噉之といふを引て、讀てフヽキといふ、卽今俗呼てフキといふは、語の急なるなり、又本草を引て、欵冬一名虎鬚、ヤマブキと註したるは、卽今俗にヤマブキといふ者にして、たとへば大小薊の如き、小薊をアザミといひ、大薊をヤマアザミといふが如し、爾雅註を引て、茨一名は雞頭草、ミヅフヾキと註せしは、卽今俗にヲニバスといふ物にして、今俗にミヅブキといふ物にはあらず、又本草を引て、惡實一名牛蒡、キタキス、一ニウマフヾキといふ、今按に蒡を房に作るものは非也と註せしもの、キタキスといふ義詳ならず、ウマフヾキといふは、其葉フヾキに似て大なるをいふ、馬莧をムマビユといふが如し、卽今俗にゴバウといふは、牛蒡の字の音をもていふなり、俗に牛の字をよぶに、午の字音のごとくするは避俗忌なり、茨惡實の如きは、其葉フヾキに似たるに因りて、フヾキの名ありといへども、實にはフヾキの類にあらず、今俗にミツブキ、ヤマブキ、イハブキなど名づけいふ、其フキといふは總名也、水と云ひ、山といひ、岩といふが如きは、一物にして其種の別れしなり、凡其フキといふもの、皆莖の中に孔ありて、是を折るに絲あるもの、陶弘景が、其腹裏有絲といひし事の如し、フヾキと云ひし義不詳、また倭名鈔欵冬の註に、一云ヤマブキ、萬葉集に山吹花と云るせしは、漢にして棣棠花といふもの、別にこれ一物なり、蕗の字楚辭に見えて、舊釋して香草とす、別錄には蕗草を甘草の一名とす、禹錫食經に見えし所は、上に見えし所の如く、欵冬は爾雅に菟奚は顆凍と見えしを、郭璞が注に、欵冬也と云ひけり、疏には本草を引て、菟奚、顆凍、豪吾、虎鬚、並に欵冬の一名とす、唐本草註に、葉欵葵而大、叢生、花出根下是也、と註したり、彼是を合せ見るに、唐本草に、葉似葵而大といひ、本草衍義に、春時人採以代蔬と云ひしが如き、食經に見えし所に相合へり、蔬といひ冬といふ、異なる物とは見えず、弘景が說に據るに、此もの高麗百濟に出づと見えたり、我國の藥名の如きは、其初百濟の博士を召して識別させし所と見えたれば、古俗このものをフヾキと云ひ、其山谷より生ずるものをヤマフヾキといひし事の如き、受け傳ふ所あり、しかるべき、倭名鈔に見えし所は、前にもしるせし事の如くに、其名同じければ、異なる物とも合せ載せ、或は同じき物をも、こゝかしこに分ち出して其註する所も詳ならざりしかば、欵冬をこゝにヤマブキといふものゝ下に、萬葉集に、山吹花とも、山振花ともしるして、讀てヤマブキともいふもの、併せ載しほどに、遂に後人をして、棣棠欵冬一物也とする謬をも致しけるとも見えたり、